

第5回 学校における統計教育

先日、書店で統計の本を探したら「理工・数学」という棚にあり、改めて「世間一般では、そっち系に分類されるんだ」と思ったところです。

『統計』とは簡単に言うと、様々な方法によって集められた情報を、使う目的に応じてまとめた上で、数字で表したものです。情報を目に見える形で表したものが「データ」で、使う目的に応じてまとめたデータの集合が『統計』ということになります。統計も「データ」の一つであり、統計データという言い方をすることもあります。

その『統計』が近年は学校教育の現場でも重要視されるようになってきています。国（文部科学省）が定める学習指導要領は約10年ごとに改訂されているのですが、平成20年の改訂以降、統計教育の重要度が高まってきているのです。

昭和40年代から50年代頃に学校教育を受けた筆者などは、授業で特段『統計』について学んだという認識はなく、かろうじて、小学校の算数で表や棒グラフ、折れ線グラフ、百分率など、中学校の数学では確率とかの勉強をしたなあ、という遠い記憶がある程度で、高校に至っては何も出てきません（苦笑）。

では今の子どもたちがどんなことを学んでいるのかというと、昔のように表やグラフについて個別的・断片的に学ぶのではなく、例えば小学校の中・高学年では、複数の表やグラフを比較して関連性や相違を理解することや、平均値や代表値、資料の散らばりなどについて学び、中学校では確率の中における不確定な領域の存在や、コンピュータを用いて母集団の中から標本を取り出して活用することなどを学んでいます。

小学校から中学校、高等学校まで、それぞれのレベルに応じた『統計』を継続的に学んで行く流れとなっており、『統計』を身近で実用的なものと感じてもらふ意味からも、日常生活や社会などにかかわる疑問や問題をテーマに設定し、それを解決するための必要なデータを集めて表現・処理し、統計量を求めることにより現状や傾向を把握したり、問題の解決策について考察したりする勉強をしています。

また、遅ればせながらではありますが、近年は大学教育においても、統計学部・学科であるデータサイエンス学部が複数の大学で開設されており、より高度で専門的な統計データを扱うことができる人材の開発・育成が進んできています。

いまはまだ、英語教育やIT教育に比べると地味な立ち位置にいる統計教育ですが、たくさんのデータがあふれる現代社会の実生活においては、それらを迅速かつ的確に処理することが必要不可欠なスキルとなってくることから、今後はますます表面へ出てくることが予想されます。

幼い頃から『統計』を学ぶ機会を得た今の子どもたちが大人になったとき、統計調査に対する理解や関心が深まるとともに、生きていくうえで役立つ学問としての『統計』となることを期待しています。

群馬県でも統計教育の一環として、統計グラフの作り方を学ぶことなどを目的とした「統計グラフコンクール」を毎年夏に開催しています。（今年で58回目）

年齢に応じた5つの部門（第1部の小学校1・2年生の部から、第5部の高校生以上及び一般の部）と、年齢制限がないパソコンの部の計6部門で作品を募集しています。多くの学校で夏休みの課題として取り組んでいただいております、今年もたくさんの作品が集まりました。11月頃から県庁の県民ホールほか、県内の数カ所で優秀作品の展示を行う予定です（日程・会場等は決定次第、群馬県統計情報システムに掲載します。）ですので、是非、足を運んでください。